

学位論文題名

文化的に構築される出産

－リプロダクションのコンテクストを考える－

学位論文内容の要旨

論文の構成：

序章 本論文の目的と背景

第1節 妊娠・出産研究の背景

5

妊娠・出産を研究テーマにすること

「お産革命」とラマーズ法

ラマーズ法のもつ意味

妊娠・出産の商品化

女性のことばで語り直す

日本以外での出産をめぐる動き

Mead と Newton による文化人類学的出産研究

妊娠・出産の文脈を理解すること

第2節 妊娠・出産研究の意義

10

身体は社会のメタファーである

女性の視点からの読み直し

第3節 本研究の視点

12

自然／文化

個人／共同体（個人／伝統・文化）

個別（ローカル）／普遍（グローバル）

注

14

第1章 妊娠・出産の先行研究と本論文の位置づけ

18

第1節 出産習俗の研究—民俗学、文化人類学、社会学

産婆の研究

文化人類学的な研究

社会学的な研究

リプロダクション研究

日本の妊娠・出産の研究

第2節 出産の社会史・歴史研究

21

産婆の時代から医師の時代へ

助産婦をめぐる研究

出産の社会史

日本の出産や産婆の歴史

第3節 産んだ女性の経験から

23

出産体験をバネに	
女どうして取り上げあう	
産んだ経験を生かす	
第4節 助産学、医学、疫学の立場から	25
自宅分娩と病院分娩の比較	
病院は最も安全な産み場所か	
助産婦のケアと医師のケア	
オールターナティブな出産を求めて	
産科処置の有効性の検討	
出産に対する考え方を変える	
第5節 本論文の位置づけ	28
注	29
第2章 産業社会の妊娠・出産	30
第1節 社会の変化と出産の変化	
前近代の自宅出産から近代の病院出産へ	
自宅出産から病院出産への移行は安全性の進歩とは別	
第2節 医学的に再構築される妊娠・出産	31
(事例1) 日本の産科病棟 1992年	
(事例2) 会陰切開 1996年	
(事例3) 誘発分娩 1996年	
医学的に語られる出産	
会陰切開をめぐる語り	
通過儀礼としての会陰切開	
第3節 病院という組織で行われる出産	35
(事例4) マーガレットの出産 イギリス(ロンドン) 1989年	
組織にとりこまれた出産	
分業による出産	
分業と知的・創造的活動との矛盾	
外科手術は分業に向かない	
それにもかかわらず出産が分業されるのはなぜか	
出産労働の主体は産婦	
医師や助産婦の労働は制御・監視労働	
産婦の労働が制御労働に引きずられる	
出産は制御されすぎるとかえって省力化にならない	
労働の節約化	
出産はなぜ工程分割が可能なのか	
出産(労働 labor)の収奪	
まとめ	
注	46
第3章 伝統的社会の妊娠・出産	50
第1節 共同体の儀礼としての出産	
(事例5) ワッティの出産 インドネシア(ジャワ島) 1996年	
共同体の体験としての出産	
食べる共同体	
助け合いとしての出産	

(事例6) 素人産婆による取り上げ 日本 1931年 固い社会	
第2節 バングラデシュ村落の出産	57
(事例7) カマラの出産 バングラデシュ (ラジョール) 1995年	
穢れとしての出産	
穢れを引きうける者としてのダイ	
女性の低い地位	
出産の場所は出産を誰がコントロールするかを決める	
情報の共有と出産のコントロール	
設備の不十分さを人手で補う	
病院に行くという選択肢はない	
病院で産むということが選択肢になる社会とは	
第3節 伝統的産婆 (TBA) について	66
インドネシアの伝統的産婆ドゥクン	
バングラデシュの伝統的産婆ダイ	
TBAのトレーニングをめぐる議論	
TBAトレーニングの問題点	
TBAによる助産の限界	
(事例8) キスモの助産 インドネシア (ジャワ島) 1996年	
キスモの語り	
ビダン・プルヴァティの語り	
緊急事態に対処しない社会	
近代医学的な権限を与えられていないTBA	
秩序や形式の重視	
TBAを支える社会的文脈	
第4節 個人と共同体のせめぎあい	75
儀礼を省略する	
伝統から個人の選択へ	
注	77
第4章 個別 対 普遍 (ローカル 対 グローバル)	90
第1節 従順な身体づくり—インドネシアの家族計画と妊婦検診	
カユマス村のビダンと家族計画	
ムランゲン村のビダンと家族計画	
避妊は義務	
妊婦健診とポシアンドゥー「健康」という義務	
ゴトンロヨン (相互扶助) という不平等	
住民参加という強制	
権力が力を行行使す手段としてのローカルなモラル	
第2節 イスラム教と人口政策の妥協—バングラデシュの家族計画	97
農村女性たちの避妊法	
男性は避妊できない	
MRという政治的産物	
ローカルな習慣をとらえ直すと	
文化か貧困か	
注	102

終章	グローバル化がもたらすもの 共同体を背景とする文化の概念 文化と社会基盤 文化のもつ拘束力 グローバルな力に対する個別の文化 社会や個人のもつ資源の重要性 自然に対する文化の優位	107
注		111
References		113
和書文献		126
	(平成 13 年 5 月 18 日提出、A4 版ワープロ打 133 頁、400 字詰 480 枚相当)	

論文の概要

序章では、著者が妊娠・出産を研究対象とするに至ったきっかけと、妊娠・出産が記述や研究の対象となってきた社会的背景に触れている。妊娠・出産というきわめて当たり前の、しかし社会の前面にでることのなかった現象が注目されるようになってきた背景として著者は妊娠・出産自体が先進国において数少なくなってきたこと、および生活のあらゆる側面が商品化されるようになってきたことをあげている。そして、本研究に一貫して流れる視点として、自然／文化、個人／共同体、ローカル／グローバルの枠組みがあることも提示されている。

第1章では、妊娠・出産の専攻研究を、4つに分けて紹介している。一つは出産を習俗として捉える研究であり、民俗学、文化人類学、社会学の立場から行われている。2つ目は、歴史的研究であり、出産観や出産自体の変遷、出産の介助者の変遷を追った研究がこれまで行われてきた。3つ目は、当事者としての女性自身の視点から出産を研究対象としたものであり、4つ目は医学や疫学などの自然科学の手法に基づいて、安全性の視点から出産を研究したものである。

第2章は、産業社会の妊娠・出産が医学と組織の原理で再構築されることを、4つの事例をもとに示している。産業社会では出産は医学の分脈に取り込まれ、病院という組織の中で行われるために、出産そのものが医学的できごととなり、かつ組織（分業を基本とする）に合うように作りかえられることになることと著者は述べている。女性たちは自らの体験を語るときに、自分が受けた産科的処置の連続として体験を再構成し、かつ自分が出産したにもかかわらず医師や助産婦が出産を行ったかのごとく語る傾向があるとの指摘もある。著者は病院での出産と工場での労働を対比させて、いずれにおいても分業という組織原理が労働の主体を組織に移行させることを明らかにしている。このことは、産業社会で力を持つのは医学やテクノロジー、組織の原理であることを示している。

第3章では、伝統的社会の出産の事例としてインドネシア村落とバングラデシュ村落の出産をあげ、そこでは出産が共同体の儀礼として、あるいは穢れとして認識されていることを述べている。そしてそのような社会では、出産は共同体の儀礼や文化に深く埋め込まれているために、文化と接点なしに出産がなされることはなく、この点から共同体の文化が個人にとってはある種の抑圧として働く場合があることがわかる。だが、伝統的社会においても、病院や助産婦による出産、そして儀礼を省略するか否かを人々が選択できるようになると、出産は共同体の分脈から解き放たれ、個人の選択へと移行する。その背後には、出産や儀礼が金銭という共通の尺度に置き換えられることによって、選択肢の比較が可能になったことがある。そしてこのような経過を経て新たな選択肢を選ぶよう、伝統や

文化は個人の選択へと場を譲り、伝統が衰退していくことになる」と述べられている。

第4章では、グローバル化が進むなかで、文化人類学においても個別の文化に焦点を当てるやり方と同時に、個別の文化をグローバルな視点から読みかえ、双方の視点を行き来する必要があることが述べられている。そのような個別と普遍を行き来する試みの例として、インドネシアとバングラデシュ村落の家族計画と妊娠健診をとりあげ、それらをひろくリプロダクションということばで記述している。そしてリプロダクションにまつわる行動を個別の文化の視点から見たのではわからなかった、健康被害や人権の抑圧が、視点をグローバルに移すことで見えてくることが明らかにされている。そして、その文化に生きる人々にとって意味を持つのはローカルな文脈に即したローカルなモラルであることが述べられている。そのためこれらの社会ではローカルなモラルが権力を行使する手段として用いられているとあってよい。

終章では、グローバル化という大きな流れの中で、文化人類学の依って立つ文化の概念を再検討し、自然／文化、個人／共同体、ローカル／グローバルの枠組みを、再度出産に適用し、全体の見取り図を示している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 梶 原 景 昭
副 査 教 授 坂 井 昭 宏
副 査 助 教 授 小 田 博 志

学 位 論 文 題 名

文化的に構築される出産

－リプロダクションのコンテクストを考える－

審査の経過：

平成 13 年 5 月 21 日 第 1 回審査委員会開催
申請論文コピー配布および検討する点の確認
平成 13 年 6 月 5 日 第 2 回審査委員会開催
申請論文の成果と特徴、疑問点の検討
平成 13 年 6 月 14 日 第 3 回審査委員会開催
口述試験の質問について検討と整理
平成 13 年 6 月 18 日(午前)口頭試問実施
平成 13 年 6 月 18 日(午後)第 4 回審査委員会開催
口述試験の内容を検討し、学位授与の可否を判定
平成 13 年 7 月 18 日 第 5 回審査委員会開催
主査が報告書の原案を作成し、委員会で検討

本論文の中心的な観点は、「生理的には人類に共通のことがらだが、文化によって多様な現れ方と意味を持ち、人々の異なる行動を引き起こすという事実は、妊娠・出産を理解する上で文化の理解が重要なことを示唆している。」という点に尽きるが、これまでに文化人類学で行われた出産をめぐる研究とは、以下の点で一線を画している。すなわち従来の人類学的研究は出産をめぐる儀式やタブー、フォークロアにほとんど集中しており、出産それ自体を一連の仮定としてとらえ、フィールドワークにもとづく民族誌的な記述と分析を行う研究はあまりなされてこなかった。その点に本論文の新しい学的寄与が認められる。

第二の特徴的な観点として、本論文は日本国内・外の 4 つの社会におけるフィールドワークにもとづき、出産の社会文化比較を行ったことが挙げられる。こうした広範囲かつ詳細な比較は出産をテーマとした研究ではこれまで十分になされてこなかった。相対的により伝統的な社会とより現代的な産業社会との比較を行ったこととあわせて、こうした点は本論文の特徴とあってよい。

第三には 1970 年代からの（日本における）フェミニズム、女性の視点による出産のとらえなおし、および選択的な出産方法の増加という、社会的な趨勢の変化などを十分に認識し、研究を行っているところに特徴がある。出産に対する「意識化」あるいはその方式を

女性が選びとることの拡がり、筆者の問題関心の背景にあるからこそ、こうした研究がなされたことは当然であるが、社会の動向を無視していない研究のダイナミックな観点は、現代人類学の研究にとって不可欠な方法とあってよく、この点も本論文の評価できるところである。

この論文が示すオリジナルな貢献として以下の3点をあげることができる。

① 個別の文化に焦点を当てるのが文化人類学のやり方であるが、本論文においてはグローバル化を背景に、個別の文化を論じると同時にそれがグローバルな視点からどのように位置づけられるかを論じ、ローカルとグローバルの視点の移動を行った。

② 妊娠・出産に代表されるリプロダクションをある一つの視点からとらえるのではなく、むしろ複数の視点からとらえ直すことで、リプロダクションのもつ多面性、またそこに可視化された社会や文化を明らかにしようとしている。

③ そうすることで、リプロダクションが何か一つの次元（たとえば医学）に還元されるものではなく、さまざまな文脈によってさまざまに構築されうる多面的なものであること、そしてその構築のされ方の中に、その文化の重要な価値が反映されることを明らかにした。

研究テーマの斬新さ、周到な方法、内外の既存の研究をよく渉獵している点もあわせて、本論文はひとつの水準を示す成果であり、論文博士に十分に価するものと審査委員会は全員一致して評価している。